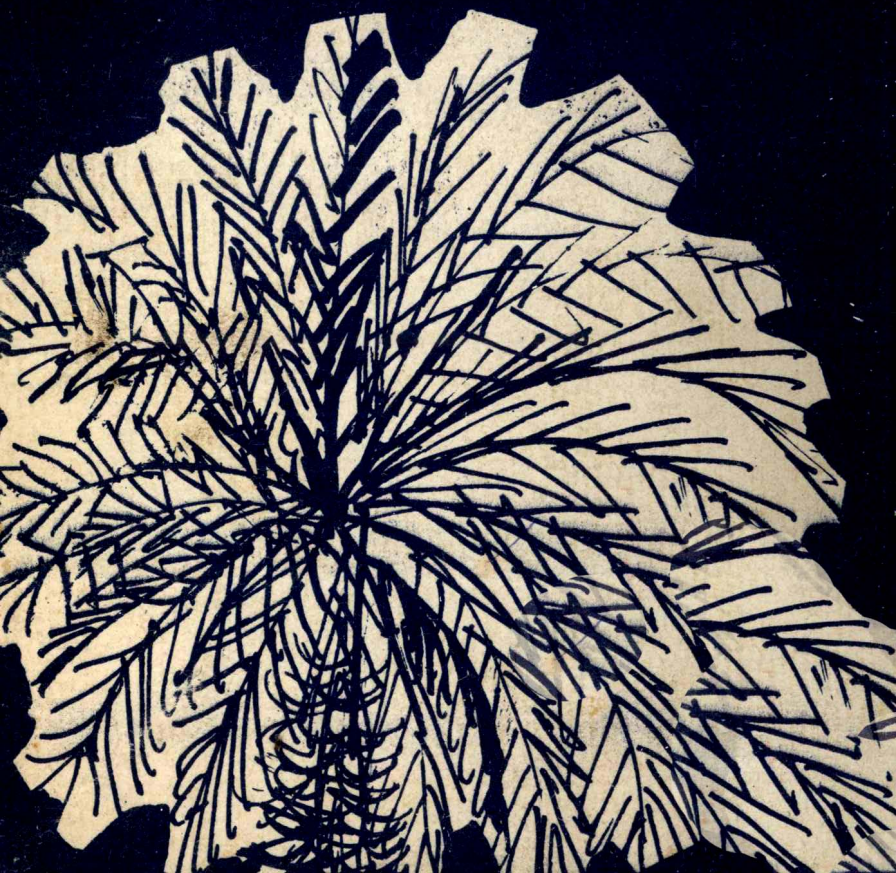


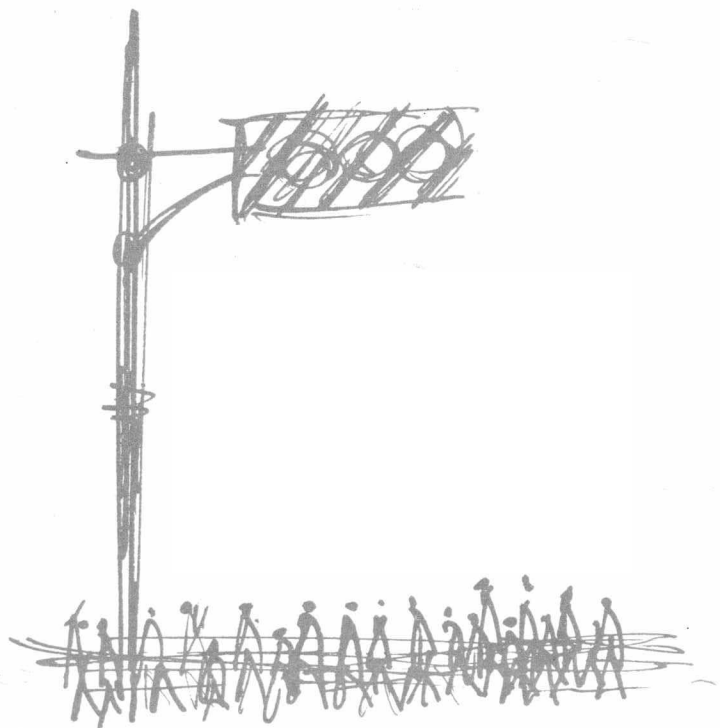
# 突然の明日

笹沢左保



# 突然の明日<sup>あした</sup>

笹 沢 佐 保



朝 日 新 聞 社

題 名 突然の明日  
定 価 320円  
発 行 昭和38年11月 1 日第一刷  
著 者 笹沢佐保  
発行者 朝日新聞社 浜名二正  
印刷所 大日本印刷株式会社  
発行所 朝日新聞社 東京 北九州  
大阪 名古屋

© 笹沢佐保 1963年

## 目 次

|     |   |     |
|-----|---|-----|
| 第一章 | 幻 | 5   |
| 第二章 | 女 | 67  |
| 第三章 | 娘 | 115 |
| 第四章 | 父 | 182 |
| 第五章 | 夜 | 242 |

装幀 長尾みのる



# 突然の明日



## 第一章 幻

### あ　る　夜

家族六人がそろって顔を合せるのは、夜の食卓を囲む時である。これは、この家庭が至極円満で、生活も安定している証拠だ。家族全員が一日中顔をそろえているのも、また滅多に親兄弟が互いの顔を見たことがないというのも、その家庭のどこかに変則的なものがあるからだろう。

夜の食卓を囲む時だけに家族たちが一人残らず集ると言っているのは、楽しいものである。離合集散があつてこそ、家族同士の和が保てると言っている。それぞれが、今日一日の出来事をさりげなく話題に供する。家族たちは箸を使い口を動かしながら、その話題について思い思いの意見を述べる。冷やかしてあつたり、批判であつたり、驚きであつたり、笑いであつたりする。何の統制もない饒舌のようであるが、これが実は一家団欒といふものである。

このような一家団欒は、家族めいめいが自分の確固とした生活の場を持っている家庭でなければ味



わえない。家族各人が順調に生きている——つまり、幸福な家庭なのである。その半面、単調で平凡な毎日を送り迎えている人々とも言えよう。しかし、単調で平凡な昨日、今日、明日であることに満足している彼らでもあるのだ。

そうした意味で、小山田家は典型的な安定した家庭であった。両親に息子二人、娘二人という家族の人数も理想的だった。小山田義久、雅子夫婦にしてみれば、結婚来三十年近くかかって一応家庭造りに成功し、ほっと落着いた時の心境である。

夫婦はよく、長男と次男、長女と次女の名前をとり違えて呼ぶ。長男の職業の難かしさに感嘆の声をもらし、長女の女らしい美しさに改めて驚いたりする。あの子が生れたのは大雪が降った晩だったとか、この子が小学校へ入ったところは毎晩のように空襲があつてねとか、そんな回想を楽しむ。人間が真の幸福を知る時期に、この夫婦は到達しているのである。

小山田義久は勤続二十五年で、協信銀行東京本店の厚生課長になった。五十一歳で本店の課長だから、決して早い出世ではないが遅い方でもなかった。生活もそれに伴って、豊かすぎはしないが苦しくもない。最近では、長男と長女が給料の半分を母親に渡すから、幾らかの余裕はあつた。

義久は夕方六時には、帰宅する。会議や宴会がない限り、五時に執務時間が終る。大手町にある協信銀行本店から世田谷下北沢の自宅まで約一時間、六時には大分ノブがゆるんで来た玄関のドアをあけることが出来た。

家では妻の雅子と次女の涼子が、身体をぶつけ合うようにして夕食の支度を急いでいる。涼子は来

年の一月に成人式を迎える。洋裁学校へ通っていたが、現在はもっぱら家事手伝いというところである。

義久とほんの五分と違わずに、玄関で大声を上げるのは次男の忠志だった。忠志は大学へ行っている。サッカー部員で、その練習のために帰宅時間が六時すぎになる。もつとも涼子に言わせると、サッカーの練習もたまには口実に使われて、忠志が若い女と連れ立って歩いているのを目撃したことがあるそうだ。

忠志の次が長女の悦子だった。テレビ会社の経理部に勤めている。生来が無口な悦子だったが、最近とみに口数が少なくなった。三月後に結婚が迫っている。一日一日と、この家の生活に訣別（りつべつ）を告げる時が近づいて来るのに、感無量なものがあるのだろう。

七時前に、長男の晴光が帰宅する。晴光がいちばん遅いのは、保健所の食品衛生監視員という彼の職業柄、当然のことだった。保健所の食品衛生監視員は多忙である。都内五十七保健所の衛生課にそれぞれこの食品衛生監視員がいるが、原則として所轄区域を一人で巡回するのだから容易ではない。二十八と言えば、食品衛生監視員としては若い方だが、それでも帰宅して来てからの晴光には疲労の色がうかがえた。

晴光が手を洗い終るのを待っていたように、

「ご飯よお！」

と、涼子が声を張上げる。

台所続きの六畳の茶の間に、義久はすでにすわり込んでいて、丹念に夕刊を読みながら二本目の銚子に手をつけている。こんな義久に誰も、ただいまとかお帰んなさいとか挨拶はしない。茶の間に入って来たことだけで、挨拶はもうすんでいるのだ。

それぞれが長い間の習慣で決っている位置に、座を占める。ご飯、吸いもの、鍋などの湯気がいっせいに立ちのぼって、食卓を囲んだ家族たちの顔が一瞬見えなくなる。

義久が無言のまま晴光の前に盃を置き、酒を注ぐ。晴光も黙って、盃を口へ運ぶ。たて続けに二、三杯、晴光に酒をすすめると、銚子が空になる。これで、義久のささやかな晩酌は終りである。

「頂きます」

と、湯気の中から呼応するように声が聞える。ここで、小山田家の小さな晩餐が始る。七時を少々回ったところである。

昨夜もこの通りだった。明日の晩もこうであるのに違いない。そして——二月十五日の夜も、そうだったのである。

「会社で退職届をいつ出すんだ？」

スキ焼の鍋をつつ突きながら、義久が長女にきいた。悦子は父親の顔をチラッと見返してから、唇を重そうに動かした。

「まだ三月もあるんですもの」

「何も結婚間際まで勤めていなくたって、いいんだぞ」

義久は、箸でつまんだ肉片を悦子の茶碗のなかへ投込んだ。

「そうねえ。早目に会社を辞めて、家にいたらどう？ その方が悦ちゃんだって、落着くんじやな  
う」

と、雅子が夫の意見に同調する。

「うん……」

悦子は曖昧なうなずき方をした。結婚直前まで勤めている必要は、確かになかった。悦子にしても、会社を辞めたくないという理由はないはずだった。それでいて、悦子にはえきらない態度をとっている。これが、悦子の性格というものだった。

涼子は、そういう姉を見ているといらだって来る。だいたい見合結婚などというものが、涼子には気に入らない。ただ一度、相手と会っただけで結婚を承諾した姉が、ひどく安っぽく思えて来るのだ。もともと、はつきりと思意思表示をしない悦子だったが、一生を託す男性を選ぶのに一度きりの見合いで——と、涼子はそんな姉の気がしれなかった。

そして今、会社を辞めた方がいいという親の意見にも、悦子は中途半端な気持でいるらしい。涼子は歯がゆさに、バリバリと音を立てて新香をかんだ。

「先方は、お前が勤めていることにあまり好感を抱いてない。格式を重んずる家庭だし、踊りの家元の親戚なんでものに、勤労者に対する理解はないんだろう」

「悦ちゃんだって、身の回りの整理だとか何とか、家でやらなければならぬことがたくさんあるん

でしょう」

それぞれ口を動かしながら、両親が交互にすすめている。だが、悦子は相変らず目を伏せたきり無言だった。

涼子是不愉快になって来た。食べ物の味が分らなくなる。話題を変えなくては、と涼子は思った。

「でもお姉さん。このごろ全然きれいになったわね。何となく、色つばい感じ……」

涼子は頓狂に声の調子を変えて、真向いの悦子に言った。

「当然の現象さ」

悦子は反応を示さなかったが、忠志が代りにそう答えた。

「でも、たいした異変よ。もともとお美しいんでしょうけど。下手な女優なんて、お姉さんには追いつかないわ。この間なんか、下北沢駅でお姉さんに声をかけられて、わたしびっくりしちゃった。

お姉さんは確か二十六だったはずだけどって、首をひねったわ。姉を見間違えるなんて、まるで嘘みただけ……」

涼子は、家族の誰もが口をはさめないほど息もつかずにしゃべり通した。気がつく、と、涼子の膝の上に魚の煮凝がシミをつけていた。

「見間違えと言えね、今日、不思議なことを体験したよ」

晴光が家族たちの顔を見回すようにして口を開いた。

「また兄貴の、今日の体験談、が始った。特殊な職業を持つ人間って、体験談を自慢話にするんだか

らね」

と、忠志がスキ焼の汁をご飯にかけながら、首をすくめた。

「いや、職業には関係ない話なんだ」

晴光は生真面目な顔つきである。

「奇跡でも起ったというのかい？」

忠志は汁かけ飯を口の中へ流し込んで、ちやかすように目で笑った。

「うん。まあ、奇跡に近いな」

「気をもたせないで、まず話すことだよ」

「銀座四丁目の交差点で、人が消えてしまったんだ」

「え……？」

「白昼の銀座で人が消えた……。奇跡に近いだろう」

「兄貴、それ真面目な話なのかい？」

「真面目な話だよ。ぼく自身が今日、体験したことなんだから……」

「人間が、お兄さんの目の前で、パッと消えてしまったの？」

と、涼子が話に割込んだ。晴光は真剣な面持ちである。冗談を言っているのではなさそうだった。もし晴光の言うことが事実だとしたら、興味深い。

「そんな消え方じゃないよ。みんな覚えていないかな、久米<sup>くめ</sup>緋紗<sup>ひさ</sup>江<sup>え</sup>っていう女性……」

晴光は、機械的に急須きゅうすの茶を自分の茶碗に注いだ。

「久米緋紗江さんて、家にも三、四回遊びに見えたことがある、新橋保健所に勤めていた人じゃない？」

雅子が答えた。

「そうか、あの兄貴に失恋して保健所を辞めた人だな」

忠志がそう言々と、食卓の周囲で幾つかの顔が分ったというふうになずいた。

「馬鹿言え。彼女は家庭の事情で保健所を辞めたんだ。まあ、そんなことはどうでもいいんだけど、今日の午後、その久米緋紗江を銀座四丁目の交差点で見かけたんだ。二年ぶりだね」

ふと、晴光は表情を堅くした。

「その久米緋紗江という人が、消えてしまったわけかい？」

と、忠志もようやく話に乗って来たふうだった。

「そうなんだ。ぼくは懐かしくもあつたし、声をかけながら彼女を追いかけたんだ。ところが彼女は、交差点の途中で見えなくなってしまった……」

晴光の言う奇妙な現象とは、こうであつた。この日、晴光は正午すぎに新橋保健所を出た。食品衛生監視員の仕事は、管轄内の飲食店の衛生管理状況を監視して歩くことが主であるが、このほかにも食中毒の調査、業者の衛生教育、夜間の一斉取締りなど不定期の任務を持っている。

午前中は、監視日報や許認可復命書、それに調査の報告書など、前日の仕事の成果を書類にまとめ

ること、いっぱいである。午後から、巡回監視という外回りの仕事に移るのが通例だった。

この日の調査復命書を作成するのに、晴光は意外に手間どった。それは前日に、管轄内の銀座七丁目にある『清六』という小料理屋で、食中毒事件が発生したためだった。この小料理屋で食事をした四人の客が数時間後に下痢腹痛の症状を訴えて来ているという医師からの連絡によって、晴光は『清六』へ急行した。

複合調理食品による軽い食中毒で、騒ぎは大きくならなかったが『清六』の調理場を調べてみると、衛生管理がまったく無視されていることが分った。食品の鮮度、洗滌設備、給水と汚物処理、加熱冷却貯蔵の管理など、食品衛生法を守っている点が一つも見られなかった。

特に晴光が眉をひそめ、店主を叱責したのは、冷蔵庫の裏側に炭が五、六匹、毒物を食べて死んだまま放置されてあったことである。強烈なアンモニアの臭気に息を詰めながら、若いだけに晴光はひどい衝撃を受けた。こんな状態で、よくも今日まで多くの食中毒患者を出さずにすんだものだと、晴光は慄然りっぜんとなった。

こうしたことで『清六』を営業停止処分にする経緯を書類にするため、今日の午前中いっぱいを費やしてしまったのである。

晴光は新橋保健所を出て、京橋方向へ歩いた。二月半ばだというのに、春のような日射しが銀座を陽気な街にしていた。路面にビルの影も落ちていなかった。太陽が真上にあるのだ。

そんな気候のせい、ウイークデーにしては人出が多かった。女の洋服の色彩が華やかである。オ



バーが重たそうだった。人々はただ歩いているだけらしかった。ショーウィンドーの前で足をとめる者もなく、どの商店も店の奥が暗く見えた。

晴光は銀座四丁目の交差点を渡った。東京一、人の流れの激しい交差点である。特に今日は、土曜日の午後のように交差点が混雑していた。

実用的デパートとビヤホール、高級アクセサリーの類を陳列している店、それに婦人物専門の洋品店が、この交差点を囲んでいる。ことに最近九階建のガラス張り円筒形のビルに改築した婦人物専門の店が、陽光を浴びて壮観だった。

晴光は交差点を渡りきってから、振返ってガラス張りの円筒形ビルを眺めた。二階から三階四階と、人の脚だけが並んでいるように見えた。

赤に変わった信号が、再び青になった。向う側から人の流れが車道へ押出されて来る。こちらからも、それを迎えうつように人の波が伸びて行く。車道の真中で、両者は交流するのである。

この時、晴光はおやつと目を細めた。彼の傍らかたわらをすり抜けるようにして、車道へ出て行った若い女の横顔と後ろ姿に見覚えがあったのだ。

誰——と判断がつく前に、晴光はその女のあとを追っていた。横断者たちの主流は、すでに車道の中央を越えていた。晴光はこちらへ向って来る人々に逆らさかって進まなければならなかった。

女は、かなり足早に歩いていた。黒いオーバーの肩のあたりかたに、長い髪の毛が散っている。右手にバッグと小型のスーツケースをさげていた。